

● 哲学者・廣松渉氏の巻

# 俗流を超えて、思想の原像を見る。

## 菅孝行

マルクス主義の失墜が言われてすでに久しい。その反面、体制の学問となった「マルクス主義」の市民権は定着し、そのかぎりて、マルクス主義タブーは無くならなかった。だが、革命の哲学としてのマルクス主義、およびそれに基礎づけられた諸科学が色褪せ、力を日に日に失ってゆきつつあるのは否定し得ない事実である。力を失っているのは、人々が「マルクス主義」と考えてきた既成の通念にすぎない、という人もあろう。だが、「通念」と真の「マルクス主義」とを区分する尺度もそれほど定かたではない。

また、広く市民権を与えられた解釈の学としての「マルクス主義」でさえも、すでに、先端的な学としての地位を追われようとしている。いや、すでに追われている。

戦後のある時期まではうたがいはなく、マルクス主義と実存主義が先端的思想であった。マルクス主義は、革命の哲学として、またそれに基礎づけられた諸科学として、実存主義は、いわば倫理として、あるいは存在の根拠を問う哲学として――。それが、いつしか構造主義にとつてかわられた。画期がいつか特定することはむずかしいが、構造主義者のレヴィ・ストロースと、マルクス主義の立場に立ったサルトルとの論争が、前者の「勝利」に帰したという解釈（レヴィ・ストロ

ース「構造人類学」のあとがき参照）が人口に膾炙した頃、とてもいえば大方の目安となるであろうか。やがてポスト構造主義が喧伝されるようになり、隣接領域の科学として、文化人類学、経済人類学、記号論が一世を風靡しはじめる。そしてその風潮は、ついに、浅田彰の「構造と力」を哲学書のベストセラーに押し上げるに至った。

だが、マルクス主義にとつてかわったとされる哲学や科学のいずれについてもいえることは、それらがあくまでも解釈の学問であって、変革の学問という性格は全く持っていない、ということではなからうか。「マルクス主義」の「失墜」以来このかた、変革の原理としての哲学や、それに基礎づけられた科学は見出されてはいないのである。

経済学についても同様の事態がある。マルクス主義経済学の現状分析力、未来展望力への信頼感は六〇年代に入ると急速に失われ、革命ぬきで未来展望を打ち出し得る学問として、近代経済学がそれにとつてかわった。六〇年代は、ケインズ主義の天下のような観を呈したのである。だが、世界的長期スタグフレーション以後、近代経済学の黄金時代も幕を閉じようとしている。たとえは西部邁のように、目ざとく気の早い人は、経世済民の学としての経済学の終焉を語っているのではな

いか。「マルクス主義」とは別次元の問題として、我々は、力ある学の危機に立ちあっているといえる。力ある学、力ある思想の危機は、マルクス主義だけの問題ではないのだ。

にもかかわらず、今、マルクス主義の失墜といわれる現象につよくこだわるのは、マルクス主義は、現実を根底からうごかすことに対して力ある哲学、力ある思想、であることによって、つまり革命の学であることよってのみ、はじめてその名に値するような「主義」である、唯一のものにほかならなかったからである。

そのような学であったマルクス主義が「失墜」したということはどういうことなのか。それを問うことを通じて、それと現代社会の存立構造のかかわりを問う、現代における現実変革にとつて力ある思想はいかにしてとり戻し得るのかを問うてみる必要があるのではないだろうか。その作業は、当然、マルクス主義の「失墜」とか「終焉」と呼ばれていることの中味を詳細に点検することを含まざるを得ない。本当にマルクス主義は終わったのか、終わった、というものは何なのか、それは現実変革の終り、革命の終りを意味することであるのか――さまざまな問いを矢継ぎ早にくり出さずには

すまされぬ、我々にとつて死活の課題がそこにはある。

かつて、三十年ほど前にも、マルクス主義の終わりを呼号するイデオロギー潮流があった。いわゆる「イデオロギーの終焉」論がそれである。だが、その時と今と、問題状況の煮つまりには格段の差異がある。第一に、「イデオロギーの終焉」論は、明白なブルジョワ・イデオロギーであった。つまり、マルクス主義の敵対者から仕掛けられた挑戦であった。今日のマルクス主義「失墜」論は、もっと広範囲の人々の暗黙の支持を得るような基盤から発せられている。それゆえ問題は、単純なイデオロギー闘争としてのみ対処しえない構造をもっている。むしろ主題は、思想、哲学、科学をのせている場の切開でなくてはならない。第二に、「イデオロギーの終焉」論の対象は、「マルクス主義」であってマルクスその人とは区分されていた。今日は、マルクスその人にまで否定の範囲がひろげられている。世界史上最大の変革の思想が根こそぎにされるのか否か、が賭けられているのだともいえる。この煮つまりは、世界の危機の煮つまりの射映にほかならない。こうした課題にチャレンジしていると思われる学者たちは、少数ではあるが皆無ではない。彼らは、大学闘争を通じて破産を宣告された大学という研究空間